

江戸時代五十嵐様式の蒔絵

——秋草文様を追って——

本 谷 文 雄

はじめに

1. 基準作品 蒔絵秋月野景図硯箱

2. 秋草文様の作品

3. 秋草の構図の系譜

論文要旨

本文は『日本美術史の水脈』（平成5年・辻惟雄先生還暦記念会編・ベリかん社発行）に掲載した同題の論文を元に、より一般の方々が理解しやすいように簡潔にしたものである。

江戸時代、加賀藩の領域であった石川県には、金沢を中心に五十嵐道甫が作ったという蒔絵がかなり残っており、その中でも一番多いのが“秋草の文様”の作品である。

今回は、五十嵐様式の蒔絵の中でも「秋草の文様」だけに的を絞って、「蒔絵秋月野景図硯箱」（重要文化財）を基準作品として、その編年を試みた。

基準作品と共通点を持つ秋草文様の作品26点の技法と意匠について列挙してきたが、一口に秋草文様と言っても、秋草の種類や技法の相違など微妙な違いがあることを分かっていただけたと思う。

五十嵐様式の蒔絵の秋草では、菊・桔梗・女郎花の技法と意匠がポイントとなる。

秋草の種類や技法によって、おおよその制作年代を知ることができる。

なお、個々の作品の形態・制作年代・寸法などについては一覧表、編年については編年表、秋草の表現については相関表を参照してもらいたい。

はじめに

本文は『日本美術史の水脈』(平成5年・辻惟雄先生還暦記念会編・ペリかん社発行)に掲載した同題の論文を元に、より一般の方々が理解しやすいように簡潔にしたものである。したがって技法など詳細を知りたい方は、上記文献を参照下さい。

筆者は石川県立美術館に勤務しており、金沢という地の利を生かして、五十嵐様式の蒔絵の研究を進めているが、江戸時代、加賀藩の領域であった石川県には、金沢を中心に五十嵐道甫が作ったという蒔絵がかなり残っており、その中でも一番多いのが“秋草の文様”の作品である。

今回は、五十嵐様式の蒔絵の中でも「秋草の文様」だけに的を絞って、その編年を試みたいと思う。

なお、写真枚数にも制限があり、本文で未掲載の図版については『江戸時代五十嵐様式の蒔絵作品』(石川県立美術館紀要5号・平成元年発行)の図版を参照下さい。文中の作品番号は多少前後するが、整理上、『江戸時代五十嵐様式の蒔絵作品』のものを使用した。

1. 基準作品 蒔絵秋月野景図硯箱

それでは江戸時代初期の秋草意匠のある重要文化財「蒔絵秋月野景図硯箱」(2 個人蔵)について、その意匠と技法についてみてみよう。(※個々の作品の寸法については表1を参照にしてもらいたい。)

蓋表に秋草と三日月、蓋裏に楼閣山水を主に蒔絵で表現する。蓋表は菊などの2つのかたまりの秋草が岩場に咲き、それを雲間から三日月が照らす絵画的情景で、右の上部に大きく余白を取っている。

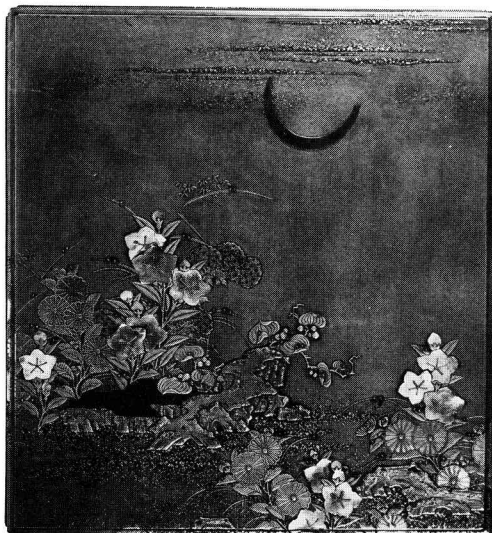


写真2 蒔絵秋月野景図硯箱

技法は、月を錫高蒔絵、菊の花弁に金金具を貼り、桔梗は花芯を金蒔絵線で「大」字を描くなど様々な技法を駆使している。岩や雲に置かれた大小様々な切金も注目してほしい。室町時代五十嵐様式の蒔絵技法を継承している。

蓋裏は一転して、雲谷風の絵画的意匠となる。中心部に城郭を配し、水平に屋根並を連ね、下方には舟が浮かぶ入江の風景である。

注目されるのは上部余白にみられる“置平

表1 五十嵐様式の蒔絵作品一覧表

番号	作 品 名	蓋裏意匠	蓋造	面取	時 代	幅	奥行	高	所 有 者	備 考
2	蒔絵秋月野景図硯箱	楼閣山水	被蓋	几帳面	江戸前期	22.0	24.0	4.8	石川県 個人	基準作品
3	蒔絵葵紋秋草図旅簞箱	楼閣山水	匳食蓋	几帳面	江戸前期	52.5	29.0	43.0	畠山記念館 伝上田 城主松平伊賀旧蔵	七宝
4	蒔絵秋月野景図硯箱	鶴散らし	被蓋	几帳面	江戸前期	22.5	24.5	4.6	石川県立美術館	七宝
5	蒔絵秋草図伽羅箱	尾長鳥	印籠蓋	几帳面	江戸前期	10.8	11.5	7.7	サントリー美術館	
6	蒔絵秋草図伽羅箱	無	印籠蓋		1695年頃	12.2	12.2	9.2	石川県 個人	
7	蒔絵秋草図硯箱	無	被蓋	削面	江戸前中期				大阪府 個人	
8	蒔絵秋草図硯箱	無	被蓋	削面	江戸中期	22.4	24.3	5.2	石川県 小松天満宮	
9	蒔絵紫陽花図硯箱	秋草流水	被蓋	几帳面	江戸前期	21.6	23.0	4.2	東京国立博物館	
10	蒔絵盆秋草図硯箱	無	被蓋	几帳面	江戸前期	19.0	20.4	4.0	石川県 個人	
11	蒔絵扇面秋草図硯箱	扇面秋草	被蓋	几帳面	江戸前期	19.3	20.7	4.1	石川県 那谷寺	
12	蒔絵扇面秋草図硯箱				江戸前期				(文献8)P452	
13	蒔絵秋草図扇面形硯箱				江戸前期				(文献9)	
14	蒔絵僧正遍昭図硯箱	秋草鹿	印籠蓋		江戸中期	21.9	23.5	4.7	根津美術館	
15	蒔絵竹垣秋草図硯箱	桐鳳凰	被蓋	几帳面	江戸前期				京都府 個人	
16	蒔絵竹垣秋草図歌書箱	無	棧蓋		1680年頃	16.7	26.2	4.3	石川県 個人	古今和歌集 清輔本箱
17	蒔絵竹垣秋草図箱	酸漿	棧蓋		江戸前期	18.4	27.0	3.3	石川県 個人	前田家伝来 布目
18	蒔絵竹垣秋草図歌書箱	月海家	被蓋	几帳面	1680年頃	16.9	14.7	2.7	出光美術館	中務集箱 布目
19	蒔絵棉図硯箱	檜垣秋草	被蓋	削面	江戸前期	21.3	22.7	4.0	サントリー美術館	
20	蒔絵竹垣秋草図十種香箱	楓桜梅	印籠蓋	几帳面	江戸前期	19.1	21.1	17.2	京都府 個人	
21	蒔絵檜垣秋草図硯箱	秋草	被蓋	几帳面	江戸前中期	21.9	24.0	4.0	ボストン美術館	七宝
23	蒔絵竹垣秋草図重箱	無	印籠蓋		江戸前中期	8.0	8.5	9.0	石川県 個人	
24	蒔絵垣秋草図歌書箱			几帳面	江戸前期				(文献9)	
25	蒔絵垣秋草図歌書箱	扇面夕顔	被蓋	几帳面	江戸前期				(文献4)	
26	蒔絵檜垣秋草図硯箱	菊散らし	被蓋	削面	江戸前期				(文献5)図10	
71	蒔絵槇流水図硯箱	秋草	被蓋	削面	江戸前中期	21.8	23.3	5.0	石川県 個人	
122	蒔絵僧正遍昭秋草伽羅箱		印籠蓋		江戸前期	12.2	12.2	9.2	東京都 個人	

目粉”で、平目粉の地蒔は五十嵐蒔絵の最大の特徴である。

以上、簡単に(2)の意匠・技法を見てきたが、これらの特徴の内、特に菊・桔梗・女郎花・雲・岩の表現は五十嵐蒔絵を識別するポイントとなる。

2. 秋草文様の作品

幸いなことに(2)の蓋表の秋草に類似する作品がかなり挙げられる。

まず最初に、石川県立美術館の「蒔絵秋月野景図硯箱」(4)は、構造・蓋表の意匠・技法とも基準作品(2)とほとんど瓜二つで、三日月と満月、刈萱と薄が異なるくらいである。

蓋表は岩場に秋草が今を盛りと咲き、右上方の雲間から出た満月が秋草を照らす夜の情景で、



写真4-1 蒔絵秋月野景図硯箱
(石川県立美術館)



写真4-2 蒔絵秋月野景図硯箱 部分
(石川県立美術館)

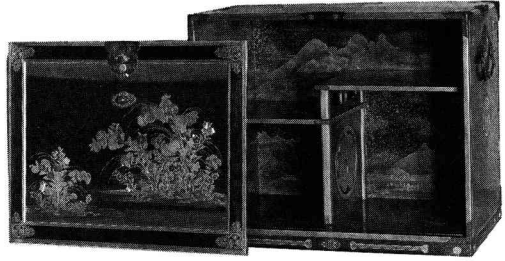


写真3-1 蒔絵葵紋秋草図旅篋(畠山記念館)



写真3-2 蒔絵葵紋秋草図旅篋 部分
(畠山記念館)

蓋裏は伝統的な松喰鳥である。

技法は菊の金銀金具、桔梗の螺鈿、女郎花の切金など共通点が多い。

意匠構成では岩場を2ヶ所に設け、右上方に大きく空間を取り、横に細く伸びる雲や、蓋側面まで伸びる構図など、まったく同じである。ただし蓋裏の平目粉は(2)と比べると、細かく密になっている。

畠山記念館の「蒔絵葵紋秋草図旅篋」(3)は、蓋表に紋菊・女郎花・桔梗などの秋草が描かれる木地蒔絵である。

秋草の技法は紋菊の花弁は金銀金具で花芯に金切金を貼るなど緻密で、金高蒔絵で薄の茎は粘着性の強い漆で一気に線を引く。土坡には下草が生え、金銀切金を45度回転させて規則正しく置くが、この手法は五十嵐蒔絵の常套手段である。

サントリー美術館の「蒔絵秋草図伽羅箱」(5)は、蓋表と四側面に野菊・桔梗・女郎花などが岩場から伸びている。蓋裏と見込には花喰尾長鳥が蒔絵で散らされている。

技法は地蒔を金沃懸地とし、桔梗は螺鈿、女郎花は金銀切金で多彩である。構図は(2)・(4)に近いが、菊の表現や萩、岩の形や描割・切金の置き方に省略が見られる。

「蒔絵秋草図伽羅箱」(6)は、蓋表と四側面にかけて、菊・桔梗・女郎花などの秋草を画面いっぱい配し、1匹だけ虫を添えるが、八重葎の意匠は珍しい。

技法は菊に金銀の金具、桔梗に螺鈿、女郎花に金銀の切金などで、地蒔は金沃懸地である。内部はすべて置平目である。(2)と比べると、萩や藤袴が登場し、こちらの方が非常に写実的で



写真5-1 蒔絵秋草図伽羅箱
(サントリー美術館)



写真5-2 蒔絵秋草図伽羅箱 部分
(サントリー美術館)

あるが、画面いっぱいに描かれ余白はなくなっている。(5)に比較すると、こちらがはるかに精巧な細工である。この箱は五十嵐蒔絵の技術が頂点に達した頃の作品である。

なお、この作品には添状があり、元禄8年頃に制作されたことが分かる貴重な作品である。

「蒔絵秋草図伽羅箱」(72)は、実物を調査していないが、詳細な写真を見ると、蓋表には秋草が岩場から咲き誇る様が描かれているが、中心には草を食べようとする馬が描かれ、岩場のそばに蘆手絵が隠されている。

四側面も同じように岩場に秋草の図柄で、蘆手絵を配するが、これは『古今和歌集卷四 秋歌上』の「名にめでて 折れる許(ばかり)ぞ おみなえし 我おちにきと 人にかたるな」の僧正遍昭の歌から取材している。

技法は典型的な五十嵐様式で、余白は細かい蒔絵粉を密に蒔いている。全体の雰囲気は(5)に近く、五十嵐様式の蒔絵で蘆手絵の例としては2例が知られるのみである。僧正遍昭の図柄は(14)にもみられたが、この作品では、僧正遍昭は省略されている。

「蒔絵秋草図硯箱」(7)の蓋表は、岩場に咲く秋草が2つのかたまりとなり、余白を黒漆塗とする。技法は典型的な五十嵐蒔絵の手法である。大きく異なるのは菊が金貝でなく金高蒔絵と描割を併用した紋菊である点である。岩の形も(2)や(4)に比べて少しくずれがみられ、菊の付描の省略・岩周囲の切金の置き方も雑になるなど秋草意匠の簡略化がみられる。なお蓋裏・見込に文様はない。

「蒔絵秋草図硯箱」(8)は、構造が(7)と同じで、蓋表の意匠は秋草を、雲から出た三日月が照らす構図で、余白は黒漆塗である。蓋裏・見込の地蒔は平日地である。

東京国立博物館の「蒔絵紫陽花図硯箱」(9)は、蓋裏に秋草と波が描かれる。右上方に重ね菊・女郎花・薄、左下方に笹竜胆が岩場の周囲に咲いている。岩・秋草とも高蒔絵を主体にする

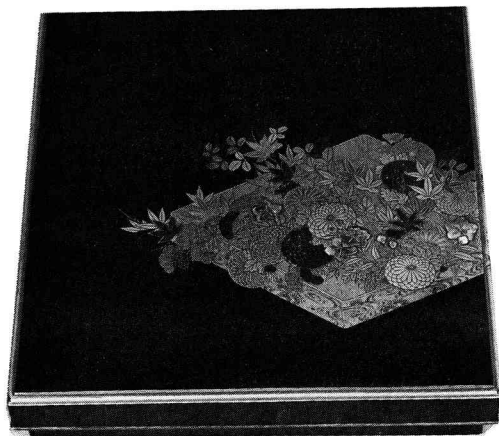


写真10-1 蒔絵盆秋草図硯箱



写真10-2 蒔絵盆秋草図硯箱 部分

が、女郎花には五菱形の切金を置く。下方に付描の波が描かれるが、秋草と波の組み合わせは珍しい。(2)・(3)と同じく秋草と自然意匠を結ぶ作品である。

「蒔絵楨流水図硯箱」(71)は、蓋裏と見込に秋草が描かれる。

蓋裏は、岩場に咲いた紋菊と桔梗と薄の意匠である。

「蒔絵盆秋草図硯箱」(10)は、蓋表右方には、菊に流水の地紋のある盆の上に、秋草を盛る意匠である。かなり図柄は小さくなり、技法は桔梗の輪郭に代表されるように、非常に精巧な細工になっている。しかし(2)・(4)に比べて高蒔絵の盛り上げは少なく、この手の作品は江戸時代前期の中でも、後半に位置すると考えたい。またこの硯箱は秋草を描いているが、盆は器物意匠に通ずる。

次に扇面と秋草を配した意匠の作品を紹介する。

「蒔絵扇面秋草図硯箱」(11)は、蓋表は総体黒漆塗で大きく扇を配し、扇面に菊・桔梗・薄を描く。桔梗は青と白色の螺鈿を貼り、中心に金蒔絵で「大」字を書く。特に白色の貝は白蝶貝と思われ(20)にも見られる。露に銀紙を打つが、これも五十嵐蒔絵に多用される。

蓋裏は全開の扇を2枚重ね、1枚は楓樹木、もう1枚は珍しい撫子の意匠である。楓樹は高蒔絵に描割で金銀の切金を置く。地蒔は選別された丸い平目粉をほぼ等間隔で置く。注目されるのは五十嵐蒔絵特有の楓樹の形である。懸子には半開きの扇1枚に薄と女郎花、もう1枚に萩を蒔絵で表現するが、女郎花・薄の穂・露は定石どおりである。なお地蒔は蓋裏と同じである。

(11)と非常に近い構図の作品が、「蒔絵扇面秋草図硯箱」(12)である。『東京美術市場史』(昭和54年・東京美術倶楽部)に掲載されるもので、「道甫 平目地扇面蒔絵硯箱 伯爵徳川家」と説明がある。

図版を見ると、蓋表に全開の扇に菊や桔梗などの秋草・半開の扇に千鳥、蓋裏に全開の扇(図柄は不明)である。懸子には半開きの扇というように、(11)と意匠・構造とも似ているが、地蒔は違うようである。

「蒔絵秋草図扇面形硯箱」(13)は、『前田侯爵家御蔵器入札目録』(大正14年・前田侯爵邸発

行)に掲載されるもので、扇形をした三段重ねの珍しい硯箱である。蓋表には秋草を描き、余白には雲間から三日月が見えるが、技法までは分からない。

根津美術館の「蒔絵僧正遍昭図硯箱」(14)は、総体黒漆塗で、蓋表に秋草に囲まれた馬から僧正遍昭が落ちる図である。実物は見ていないが、技法は(2)や(4)などの手法とは異なるようで、江戸時代中期の秋草表現と考えたい。なお馬なども薄肉の蒔絵と思われこれも中期の特徴である。しかし、女郎花や菊の花芯の切金、さらに土坡の切金の置き方に五十嵐蒔絵の特徴がでている。

蓋裏・見込の図柄は、野山に楓や秋草が咲き、鹿が遊ぶ自然景観の意匠で、地蒔は平目粉を密に蒔く。

次に、竹垣や檜垣に秋草を配する構図をとる作品を紹介する。

「蒔絵竹垣秋草図硯箱」(15)は、(2)・(4)と同じ構造の姉妹作である。

蓋表から側面にかけて竹垣に秋草、背景は一切省略され、金沃懸地とする。蓋裏・見込は平目粉を密に蒔いた地蒔に、尾が唐草形の鳳凰に桐枝が散らされるが、これは(4)の鶴と、鳳凰の意匠が異なるだけである。

この作品は(2)と垣のある秋草を結ぶものとして注目されるが、垣のある作品で金沃懸地の地蒔はこの作品だけである。

「蒔絵竹垣秋草図歌書箱」(16)は、前田家伝来の重要文化財『古今和歌集清輔本』を納める箱で、長方形で珍しく四方棧蓋造りである。

蓋表は、下方にZ状に配された竹垣から秋草が咲き乱れる絵画的な情景で、上半分の余白は黒漆塗である。桔梗などは(2)などと一致するが、菊は野菊で、裏彩色をした螺鈿を嵌めている。

技法は、菊花弁を螺鈿と金金具で花芯に金切金を隙間なく置き、桔梗は螺鈿、蓋裏は平目粉を詰めて蒔く。

この作品には、古今和歌集に古筆了祐の極札があり、それには庚申と書いてある。古筆了祐の生没年が1645~84年であるところから庚申の年は延宝8年(1680)ということになる。

「蒔絵竹垣秋草図箱」(17)は、(16)を反転したような構図で、菊・桔梗・薄を配し、菊は(2)・(4)と一致するが、花卉は金銀金具の併用である。蓋裏は(16)が無文様なのに対して、こちらは中心部に支柱で支えられた1本の酸漿が高蒔絵で表現される。酸漿の葉・花・実とも写実的で、葉脈は例によって付描と描割を使い分ける。なお地蒔は(16)同様、平目粉を密に蒔く。

技法は一見すると(2)と同じ所が多いが、詳細に見ると菊の花弁は20枚以上になり、葉脈の



写真15 蒔絵竹垣秋草図硯箱



写真19 蒔絵棉図硯箱 (サントリー美術館)

数は多くなっている。これらは時代が下がり新しいためと考えたい。また桔梗の蕾と酸漿の珊瑚なども注目される。意匠では蓋裏の酸漿は後述する(19)と似ていて興味深い。なお構造は(16)と同じである。

出光美術館の「蒔絵竹垣秋草図歌書箱」(18)は、前田家伝来の中務集を入れる箱で、構図・技法はほとんど(17)と同じであるが、竹垣の向きが違い、横長の構図を取る点が変わっている。

蓋表の竹垣の方向は(16)と同じで、高蒔絵と描割の技法を用い、押縁には錫か鉛と思われる厚めの金具と螺鈿を嵌める。

地は黒漆塗で(17)同様布目が見えるが、よく見ると下塗の朱漆も見えている。布目は五十嵐蒔絵の特徴のひとつに数えられる。(16)・(17)は蓋表を黒漆塗とし、揃って前田家伝来というように共通点が多いが、技法を詳細に見ると、菊の葉脈や桔梗の輪郭などより近いことが分かる。布目・珊瑚の技法からは(17)と(18)は非常に近い。この作品も、中務集に古筆了祐の庚申の極札により、延宝8年(1680)頃の制作と思われる。

サントリー美術館の「蒔絵棉図硯箱」(19)は、蓋表の中央に棉と、それを支える6本の支柱に岩を描くだけで、他は一切を省略して金の地蒔となる。

蓋裏は檜垣を囲んで秋草が咲き、五十嵐蒔絵特有の岩も見えている。なお見込も秋草の意匠である。意匠で興味を引くのは、蓋表の棉(酸漿)が、上方に小さく咲く花も含めて、(17)の蓋裏の酸漿に似ていることである。しかし実は(17)が珊瑚、こちらは銀高蒔絵である。不思議なことに、この作品には今まで必ず描かれた菊・桔梗がない。地蒔は蓋表が平目粉を薄く蒔き、蓋裏は平目粉を詰めて蒔く。

「蒔絵竹垣秋草図十種香箱」(20)は、蓋表から側面にかけて竹垣に菊・桔梗・薄を配し、地蒔は平目粉を密に蒔く。

蓋裏・身内部は尾長鳥と菊枝の散らし意匠を描き、地蒔は平目粉を密に蒔く。付属の箱には竹垣に桜・竹垣に梅・竹垣に楓樹、香合と札筒には野菊・萩・女郎花を描くが、地蒔はいずれも細かい平目粉を密に蒔く。意匠では桜が初登場である。

ボストン美術館の「蒔絵秋草檜垣図硯箱」(21)は、蓋表に菊などの秋草と檜垣を画面いっぱいに配し、余白は少ない。技法的に前述の作品と異なる点は、菊の花弁に螺鈿を使用するところと、萩の花に一部銀蒔絵を用いる点である。鳶と羊歯の意匠は珍しい。桔梗や菊の花が小さくなるのは今までにない傾向で、これらは時代が下がるためと思われる。

「蒔絵竹垣秋草図重箱」(23)は、他に例がない構造で、当初は香道具の付属品である。表面は竹垣に秋草を描く。地蒔は蓋表・内面・底面すべて平目粉を中蒔にする。

以下は文献からの、垣に秋草意匠の作品である。

「蒔絵垣秋草図歌書箱」(24)は、『前田侯爵家御蔵器入札目録』に掲載されるもので、『定家小本』を入れる歌書箱である。

横長の構図で、図版で見ると、柴垣に秋草が見え、菊は金貝、桔梗は螺鈿で、上半分は大きく余白を残し、総体黒漆地である。

「蒔絵垣秋草図歌書箱」(25)は、『ミュージアム71号』で紹介されたもので、図版を見ると蓋表は垣に菊・桔梗・薄が咲く絵画的情景で(17)に近い。しかし竹の立子は省略され、右下方にも菊と薄が添えられている。なお蓋裏は扇面に夕顔を蒔絵で表現する。技法も(17)と同工異曲である。

「蒔絵鹿秋草図硯箱」(65)は、蓋表は秋草に戯れる2匹の鹿を描く。秋草は桔梗が金蒔絵・薄の穂と萩の花が銀蒔絵・女郎花は銀蒔絵の上に丸い点を盛り上げる。

蓋裏は菊などを金銀蒔絵で描くが、盛り上がりは少ない。野菊の花芯の切金、女郎花の菱形の切金などに、江戸時代前期の秋草のなごりがあるが、女郎花は螺鈿ではないし、岩の形態も変わってきている。なお地蒔は平目粉を中蒔にする。

この作品の制作年代は江戸時代中期と推定するが、岩の形態や秋草がくずれをみせ始めており、江戸時代前期と後期を結ぶ過渡期の作風を知る重要な位置を占める。

以上、基準作品と共通点を持つ秋草文様の作品を列挙してきたが、その数は多く、一口に秋草文様と言っても、秋草の種類や技法の相違など微妙な違いがあることを分かっていただけだと思う。

3. 秋草の構図の系譜

(2)の基準作品の秋草の構図が突然完成したとは考えられない。日常ごく自然に見られる光景であった。その後この構図は、蒔絵意匠として再び脚光を浴びる。

基準作品(2)の構図と結び付く最も古い蒔絵作品として根津美術館の「蒔絵秋野手箱」を紹

介する。この作品は南北朝時代の制作とされるもので、秋草の咲き乱れる中で、鹿・兎・鳥・虫たちが遊ぶ構図である。注目されるのは女郎花と藤袴が同時に描かれている点で、女郎花の花はすでに星形となっている。

技法はまだ(2)ほど発達していないが、薄の水滴に銀か鉛と思われる鋳を打っており、この作品の構図・技法が(2)に発展したことは十分考えられる。

室町時代の作品で最も(2)に近い構図が、根津美術館の「蒔絵春日山図硯箱」の蓋表である。菊が描かれていないのが異なるが、月・女郎花・薄・山帰来など共通点も多い。東京国立博物館の「蒔絵砧図硯箱」の蓋表の構図は岩場の表現など、より(2)に近づくが、これにも菊は登場しない。しかし、技法に差はあるものの、この作品にも女郎花や山帰来など共通の秋草が描かれている。

室町時代の作品と(2)を結びつける作品として注目されるのが、「蒔絵秋草図硯箱」(7)と「蒔絵秋草図硯箱」(8)である。

(7)と(8)の構造は室町時代の硯箱によくみられる構造であるが、構図は少し異なる。すなわち、両方とも黒漆地に雲と秋草を描いており、(8)は秋草がひとつのかたまりであるが、(7)はふたつのかたまりである。技法からみれば(7)は(8)よりもかなり技巧的である。つまり(7)は高蒔絵や螺鈿の技法を使うのに対して(8)は平蒔絵である。

現時点では、(8)がすんなり、江戸時代中期・後期の作品と結びつかないので、(8)は(7)より古く室町時代から桃山時代の制作と考えたい。

(8)は(2)に先行するものと考えたが、(7)の編年はいまでも迷っている。構造は古式であるが桔梗に輪郭のあるのが気にかかる。今回はとりあえず(7)は(2)よりも古様であると考えたい。

次に個々の秋草の系譜を探ってみよう。

菊(きく)

江戸時代の五十嵐様式の蒔絵で、菊は最も多く描かれる秋草であるが、大きく分けて次の3つの系統に分類することができる。(表2参照)

- (A) 紋菊 皇室の紋のような菊
- (B) 野菊 花卉がまばらで離れている菊
- (C) 重菊 花卉が重なりあった菊

(A)の形式が最も多く、基準作の(2)もこの形式である。(3)のように(C)と併用して用いられている例もあり、同時代に紋菊と重ね菊が用いられたことが分かる。花卉の数は(2)が16枚で、この枚数の作品が最も多く、やがて時代の経過とともに18枚と数を増し、(17)の26枚を頂点に、江戸時代の中期・後期になると消滅して主役の座を(B)と(C)に明け渡してしまう。なお、花卉の多いものは、葉の葉脈の数も多くなるという規則がある。つまりそれだけ緻密な技法が駆使

表2 秋草文様の編年表

	室町	江戸前期	1680年頃	1695年頃	江戸中期
紋菊	7	2 = 4 = 74 ≥ 15 ≥ 72 ≥ 17 = 18 = 24 = 25		> 6	20 > 71 ≥ 21 > 23
野菊	8		5 > 16		> 11 > 14 > 65
重菊			3 = 9 > 10		
なし			19		

※この表の見方

秋草文様の作品に一番多く登場する菊をひとつの基準としてとらえ、菊の形によって紋菊・野菊・重菊の3つに分類し、菊のないものを付加し、縦の座標とした。横の座標は時代であり、左ほど古く、右ほど新しい。なお、(11)と(20)のように、菊の形態は違っても同工異曲のものもある。

>は左側が古く、≥は左側が古様であるが、あまり時代差はないことを意味する。

=は同じ手法である。

されているということである。

紋菊でも基本的な形は(2)のような金の金貝で、輪郭を金蒔絵線でくくったものであるが、銀金貝と併用したものも現れ、やがて形は残しながらも、高蒔絵となり姿を消していく。

つまり、(7)のような高蒔絵から→(2)のような金金貝→(17)のような金金貝と銀金貝の併用→(71)のような金高蒔絵と移行する。

(B)は9例紹介したが、五十嵐蒔絵の特徴は、中心部分に切金を細かく置くことである。(20)のように(A)(B)(C)を併用したものがあり注目される。時代の流れで図示すると、(8)→(5)→(16)→(11)→(14)・(20)→(65)→(73)となる。

(5)は地蒔が金沃懸地と(2)に近く、時代も少し遅れるくらいであろう。(20)と(65)には、江戸時代前期と中期の大きな時代差がある。繁雑な紋菊がやがて簡便な技法の野菊となり、明治時代まで引き継がれる。

重菊は6例あるが、江戸時代前期から用いられる。(20)の重菊は蓋裏に用いられ標準とされる高蒔絵の(9)とはかなり趣が異なる。図示すると、(3)・(9)→(10)→(20)→(73)となる。

以上、3つの形式の菊の系統を個々にみてきたので、それに個々の関係を加えると表2のような編年になるが、菊の描かれていない(19)も他の文様と技法から追加しておいた。

桔梗(きぎょう)

桔梗は室町時代の作品にも描かれるが、小さくあくまでも脇役で登場するだけであるが、江戸時代に入ると、秋草全体が大きくクローズアップされるに伴い、主役のひとつとなる。多くは螺鈿で裏彩色で色に変化を持たせたものや、(11)や(20)のように白蝶貝を埋めたものもある。中心に金蒔絵で放射状に「大」の字を書くことが多い。輪郭は(2)・(4)・(74)のように江戸時代初期のものにはなく、それよりも時代がやや下ると技法も緻密になり、輪郭を蒔絵の線でくく

るようになるが、やがて、形も小さくなり、螺鈿が平蒔絵になる。

女郎花（おみなえし）

女郎花も一般的な花である。菊・桔梗・薄と女郎花は五十嵐様式の蒔絵の秋草の4点セットで、判定の基準になる重要な花である。

技法は花を丸い点で表現したものが、江戸時代に入ると(2)のように金切金を細かく置き、中に菱形の銀の切金を五角の星形状に貼るのが一般的であり、これが五十嵐蒔絵の大きな特徴である。しかし、この緻密な技法も江戸時代中期から後期にかけて姿を消してしまう。

藤袴（ふじばかま）

女郎花によく似た花として藤袴があるが、藤袴だけで描かれることはなく、必ず女郎花と同時に描かれている。(3)・(5)・(6)・(19)など同時に描かれたのを見ると葉のつきかたが違うので識別することができる。

薄（すすき）

薄も一般的な秋草で4点セットである。江戸時代前期の作品で、かなり格調のある作品には水滴を表現する銀鍍が打たれている。薄は(10)を除いてすべての作品にみられるが、優雅な曲線は叙情的でいずれの作品も筆が走っている。失敗が許されないだけに、よほど熟練した者でないと描くことはできまい。

刈萱（かりかや）

なお、薄と似た草花に刈萱（かりかや）があるが、薄のように曲線ではなく途中で折れており、しかも葉の形が違うので区別することができる。刈萱は(2)・(24)・(72)・(74)の作品に描かれるだけで江戸時代中期以降は姿を消してしまう。

笹竜胆（ささりんどう）

笹竜胆は菊などの4点セットと違い、画面の中心に大きく描かれることはなく、岩場の隅で小さくひっそりと咲いているので、よく見ないと見落としてしまう。(2)など11の作品に描かれているが、技法が段々と省略される江戸時代中期以降には姿を消してしまう。

萩（はぎ）

萩を描いた作品は(5)や(6)など9作品にみられるが、(2)・(4)・(74)などの初期の作品には見あたらない。技法がより緻密になる江戸時代前期から登場し、(73)のように明治時代まで生き伸びる。

山帰来（さるとりいばら）

赤い実をつける山帰来は、室町時代の五十嵐蒔絵とされる根津美術館の重要文化財の蒔絵春日山硯箱にもみられ、その流れを受けたと思われる基準作品(2)にも描かれる。他は(4)と(74)にみられるだけで、早いころに姿を消してしまう。

楓（かえで）

楓は他の秋草とは一線を画すものである。(10)のように他の秋草といっしょに描かれるものも

表3 秋草文様相関表

番号	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	14	15	16	17	18	19	20	21	23	24	25	65	71	72
菊	○	○	○		○	○						○		○	○		○	○	○	○	○		○	○
紋菊	○	○	○		○	○						○		○	○		○	○	○	○	○		○	○
枚数	16	18	16		16	16						18		22	18		16	16	16	18	16		16	16
野菊		○		○			○		○	○	○		○				○					○		
重菊																	○							
桔3	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○		○	○		○	○	○	○	○
女郎花	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○
薄	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○
藤袴		○		○	○											○							○	○
刈萱	○				○											○							○	○
山婦来	○		○																	○				○
笹竜胆	○	○			○			○									○						○	○
萩				○	○		○		○		○													
楓				○	○		○		○		○						○							
岩場	○	○	○	○	×	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	○	○	○
垣	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
女郎花	○	○	○	○	○	○		○	×	○	?					○	○	○	○	○	○	○	○	○
星	○	○	○	○	○	○		○	×	○	?					○	○	○	○	○	○	○	○	○
桔3	×	○	×	×	×	○		○	×	×	○	○	×	○	○		×	×	○	○	○	×	×	○
輪郭	×	○	×	×	×	○		○	×	×	○	○	×	○	○		×	×	○	○	○	×	×	○
銀鋳	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
珊瑚	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
備考					虫													虫						

※横は作品番号 縦は秋草の種類・技法など ○は有 ×は無 ?は不明
4番の花びらの枚数は16~17枚 17番は22~26枚 71番は16~18枚である。

あるが、多くは単独でモチーフとなるものである。

その他

珍しいところでは(6)の八重葎(やえむぐら)や、(17)の酸漿(ほおずき)、(21)の羊歯(しだ)がある。秋草ではないが(6)と(21)には虫が添えられている。なお、個々の作品の秋草は相関図を参照してもらいたい。

岩場(いわば)

秋草ではないが、岩場も時代判定の重要な決め手になる素材である。初期においては月と雲と岩場がセットで描かれていたが、(19)のように例外もあるが、垣が描かれると当然岩場は不要になり、やがてはなくなってしまふ。

以上、五十嵐様式の蒔絵の秋草をみてきたが、秋草の種類や技法によって、おおよその制作年代を知ることができる。なお、個々の秋草については表3を参照してもらいたい。

(石川県立美術館 国立歴史民俗博物館共同研究協力者)

“Makie (work or decorative technique used in lacquer ware,
employing sprinkled gold and silver powders and filings)” of
Igarashi Style in Edo Period
—Tracing the “Akikusa-Monyō (autumn flowers and plants
patterns)—

MOTOYA Fumio

In this paper, I outline the subject based on the same titled paper inserted in “Undercurrents of the History of Japanese Fine Art” (published by Pelican Co., Ltd., in 1993, edited by the Association for the Commemoration of Professor Nobuo Tsuji’s 60th Anniversary). It is directed to the easy understanding of the general readers.

In the Edo period, there were respectable numbers of “Makie”s which were produced by Dōho Igarashi of Ishikawa Prefecture (then the Kaga Domain). Most numerous among them were the works with “Akikusa-no-Monyō”.

Here, I will establish a chronicle of Igarashi-style “Makie”s focusing on the works with “Akikusa-no-Monyō”, selecting his “Makie-Akizuki-Yakei-Makie-Suzuribako (‘Makie’ inkstone case with the design of a view of a field with an Autumn moon)”, designated as important cultural Property, taking this as a standard work.

As I list the techniques and designs of his 26 works which have characteristics in common with the standard work, I think that the readers will appreciate the slight differences in the selection of Autumn flowers and plants and techniques in those works, even though they are included in the works of the same “Akikusa-Monyō”.

In the selection of Autumn flowers and plants in the Igarashi-style “Makie”s, the techniques and designs of chrysanthemums, Chinese bellflowers and perennial plants with yellow flowers are the most important features.

We could roughly guess the dates of productions by considering the sort of Autumn flowers and plants and the techniques there used.

Please refer to the list regarding the type, date of production and proportions of each work, the table regarding the chronology of the works and the comparison table regarding the expression of Autumn flowers and plants.